倉吉西瓜産地強化・加速化プラン

～目指せ販売額16億円～

【本プラン・再審査】

令和3年5月

倉吉市

別記様式４

１　プラン策定主体名
　　倉吉市
２　プラン名　「倉吉西瓜産地強化・加速化プラン」
３　対象地区　倉吉市全域
４　対象地区の現状

倉吉市では、豊かな自然を生かした農業が、古くから盛んに行われてきた。日本海にそそぐ天神川を中心とする各河川周辺には豊かな水田地帯が広がり、一方南西部の大山山麓に及ぶ火山灰地帯には肥沃な畑地帯が形成され、水稲をはじめ、スイカ、キャベツなどの野菜、梨を中心とした果樹、酪農、肉用牛などの多様な農産物が複合的に生産されている。

現在、海外を含めた産地間の競争の激化や、世界的な気候変動、消費者ニーズの変化、新型コロナウイルス感染症など、国内農業を取り巻く情勢は一段と厳しくなってきている。また、地域農業においては農業担い手の高齢化や後継者不足、さらには農業所得の減少や遊休農地の増加といった問題が倉吉市でも深刻化している。

そのような状況の中、倉吉市の特産物である「倉吉スイカ」は、肥沃な畑地帯である久米ヶ原台地を中心に、大山山麓から流れる清涼な水を使用し、春には日照量に恵まれた天候により、糖度の高い高品質なスイカが栽培されており、今年は 88ha で栽培され、10.7 億円売り上げている。

その中でも、「極実（ごくみ）すいか」は、一般的なスイカ栽培で使用するかんぴょうの台木を使用せず、スイカの台木にスイカを接いで栽培しており、しっかりと手間をかけ、スイカ本来のシャリ感を持ちながら、薄い皮と柔らかい食感が人気の品種で、倉吉市を代表する特産品となっている

平成 28 年には鳥取県中部地震により倉吉市は大きな被害を受けたが、生産者の皆さんから今こそ倉吉スイカを盛り上げたいという声があがり、生産者・農協・行政が連携し、スイカ生産のピークであった平成 7 年の販売額 16 億円を目指す取組を行っていく「倉吉スイカ 16 億円達成プロジェクト」（以下、倉吉スイカプロジェクト）が立ち上がった。

本プロジェクトの活動として、東京都中央卸売市場（大田市場）において、JA 鳥取中央代表理事組合長、倉吉西瓜生産部長、倉吉市長などによる、極実すいかのトップセールスを毎年行い、生産者らと共に販売拡大を図るための PR を通したブランド力強化の取組を行っている。

また、平成 27 年度より継続して行っている鳥取型低コストハウスによる施設園芸等推進事業も、本プロジェクトが始まった平成 29 年度からはハウス導入面積が大幅に伸びており、倉吉市としても倉吉スイカの栽培規模拡大とハウス導入による高品質なスイカの生産、後作の高収益化のための必要不可欠な事業として積極的に取組んでいる。

さらに、新規就農者の確保のため、平成 30 年度から園芸産地継承システムづくり支援事業を活用し、大阪で開催される移住希望者や就農希望者向けのイベントに出展した。その他にも、移住定住担当部署と連携を強化し、移住と就農のビジョンをセットで提案が行えるよう産地提案書の作成を行った。

近年は販売単価も好調に推移しており、販売額 16 億円達成に向け、生産部会を中心に今こそ更なる取組が必要だと考えているところである。協議をかさねるにつれ、次に挙げる様々な課題が見えてきており、生産部・行政・JA・関係機関が連携し、その課題を包括的に解決する必要があると考えている。

倉吉市における農家・農地の概要

	農家数（戸）
総農家戸数	2,575
専業農家数	412
兼業農家数	1,190

倉吉市における耕地面積

		面積（ha）
経営耕地面積		2,663
	田	2,051
	畑	501
	樹園地	111

出展：2015 農林業センサス

倉吉市における春作スイカの動向（鳥取中央農業協同組合中央営農センター果実園芸課より）

	平成７年	平成 29 年	平成 30 年	令和元年	令和２年
生産者数	333 名	128 名	128 名	125 名	126 名
耕地面積	171ha	92ha	89ha	87ha	88ha
生産量	7,850t	4,900t	4,330t	4,610t	4,550t
売上	1,587,000(千円)	982,000(千円)	973,000(千円)	1,014,000(千円)	1,074,000(千円)
単価	202 円/kg	200 円/kg	224 円/kg	222 円/kg	236 円/kg

倉吉市における「鳥取型低コストハウスによる施設園芸等推進事業」の実施状況

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度	計
面積	65a	87a	348a	153a	46a	699a
事業費	38,500（千円）	55,099（千円）	218,931(千円)	96,940（千円）	31,027（千円）	440,497(千円)

倉吉市における新規就農者数（スイカを基幹作物とする者）

平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度	令和３年度予定
1	1	3	4（夫婦１組含む）	2（夫婦１組含む）

※各年度に倉吉市が認定した人数

５　対象地区の課題

平成 29 年に倉吉スイカプロジェクトが立ち上がってから、「人」と「農地」を柱として、新規就農者の確保や農地の流動化に向けた生産部会員へのアンケートの実施や調査が実施され、協議されてきた。また、今回地域プランの策定にあたり、生産部会での意見交換や、プラン策定委員会等で検討を進めた結果、「新規就農者の確保」「担い手の育成」「優良農地の継承」「収益性の向上」「ブランド力の向上」の５項目が重点課題として集約された。

（１）新規就農者の確保について

倉吉西瓜生産部会では、「就農者を確保」するため、県内外へ向けたリクルート活動や研修生の受け入れを精力的に行っている。特に関西圏で開催されている就農相談会へは積極的に参加してい

るが、就農推進に関する活動は全国的にも多くの地域、団体で取り組まれており、人の目に留まり、足を止めてもらえるための工夫が必要である。

具体的には、

「倉吉市がどのような場所で、スイカ産地倉吉とはどのような産地であるのか」

「就農した場合どれくらいの収入が期待でき、どのような生活になるのか」

「数多くの就農募集がある中、他地区と比べ就農者にどのようなフォローがあるのか」

といった、就農後の自分をイメージしてもらうことを主眼とした戦略的な情報発信を行うことが、これまでの活動・倉吉への就農者からの聞き取りにより重要であると考えている。

さらに、その後の「就農者の育成」のためには、「ハード」においては早期自立へ向けて営農開始期における優良農地の手あてや設備投資の負担軽減、「ソフト」においては、早期技術習得へ向けた、指導体制と環境整備が不可欠である。

【これまでの生産部会の新規就農確保に係る活動状況】

年度	実施した活動
H30～R 元	関西圏の就農相談会へ参加（新・農業人フェア、マイナビ就農 FEST） ふるさと就農体験研修の受入れ 農業大学校での講話
R 元	産地提案書の作成
R２	産地提案書改定、研修生募集チラシ作成、県内就農相談会等参加

【研修生の受入実績（H29 年度～）】

受入期間	活用研修	研修生人数
H28.10～H29.10	（農大）スキルアップ研修	１名
H29.2～H30.7	（機構）アグリスタート研修	１名
H30.2～R2.1	（農大）先進農家実践研修 （機構）アグリスタート研修	１名
H31.2～R2.1	（農大）先進農家実践研修	１名
H31.2～R3.1	（機構）アグリスタート研修	１名（I ターン）
H31.2～R3.1	（農大）先進農家実践研修 （機構）アグリスタート研修	１名
R2.2～R3.1	（機構）アグリスタート研修	４名（夫婦２組）

（２）担い手の育成について

今後、産地を維持・発展させるためには、現在の中核農家に加えて、軌道に乗り始めた新規就農者、親の基盤を受け継いだ若手農業者の活躍が不可欠であり、そのためにもそれぞれが規模拡大・設備投資を円滑に行えるよう、産地としてバックアップできる体制の構築が必須である。

特に、産地の中核生産者の規模拡大やハウス導入に適した優良農地が不足しているところであり、具体的には、「まとまった面積」「排水の良い」「水源の確保できる」といった要素を満たす圃場が望まれている。

スイカ栽培の中心となっている久米ヶ原地区では、これまでも農地の活用状況等様々な調査がされてきたが、傾斜地の圃場も多く、かん水設備も十分整っていないことなどから、作型はトンネル栽培が中心で、新たにスイカ作に仕向け可能な既存農地はほぼ何らかで活用されている状況である。

また、地区全体に遺跡が点在しており、農地の転換、再整備には踏査が必要になるなど、解決すべき課題も多く、この地域のみでの優良農地確保が難しい状況となっている。

前述のとおり、産地強化のためには施設栽培に適した優良農地の確保が不可欠である。そのためにも、久米ヶ原地区だけでなく市内全域での新たな農地確保の模索が必要である。

（３）優良農地の継承について

農地の不足については上記（２）に記載したとおりであるが、一方で高齢化・後継者不在等により栽培を断念する生産者も毎年少なからず存在する。

これまでは、「規模縮小する生産者」と「拡大したい（農地を求める）生産者」とのマッチングがうまくできず、優良なスイカ畑が失われ遊休化してしまう事例があり、円滑な農地継承のシステム化を図ることが求められているところである。

また、現在荒廃化しているものの中にも有望な農地は存在しており、優良農地不足解消のためにも、この再生は産地にとって重要な取組である。

これまで農地の利用状況の把握については、倉吉市人・農地チーム会議（以下 人・農地チーム会議）の場でエリアごとの検討を行っており、久米ヶ原地区での新たなスイカ畑整備の可能性や既存農家の分散錯圃解消を図る上での基礎資料としての利用が期待されている。

【参考：倉吉市人・農地チーム会議】

担い手の高齢化や後継者不足、耕作放棄地の発生などの、地域が抱える人と農地の問題を解決するため、関係機関が情報を共有し、実現可能な目標を定めて取り組む会議。

遊休化している農地の再生や利活用、農地を希望する者とのマッチング、優良農地の整備と確保を進めている。構成組織は以下のとおり。

（構成組織）

・（公財）鳥取県農業農村担い手育成機構
・土地改良区
・鳥取中央農業協同組合
・鳥取県中部総合事務所農林局農業振興課、地域整備課、倉吉農業改良普及所
・倉吉市農林課
・倉吉市農業委員会

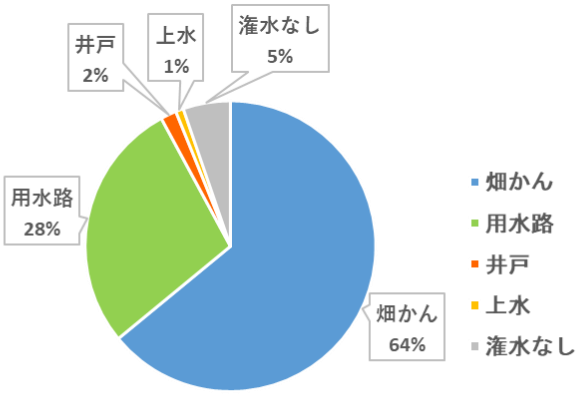
【これまでの農地に関する調査】

実施年	調査機関	調査内容
H29 年	倉吉市 人・農地チーム会議	・農地の活用状況調査 （図面上に色分けし、耕作状況を把握。遊休化要因、立地要件等により活用の可能性を整理。）
H30 年	倉吉市 人・農地チーム会議	・生産者の今後の作付意向調査アンケート →図面化 ・ドローンによる久米ヶ原スイカ作付状況調査 ・農地の活用状況調査（畜産飼料畑、スイカ畑中心）
R 元年	倉吉農業改良普及所	・農地の活用状況調査（畜産飼料畑、スイカ畑中心）

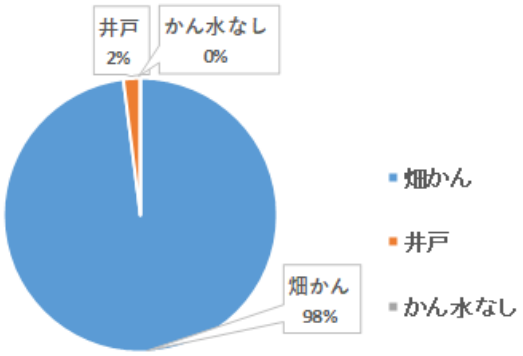
（４）収益性の向上について

スイカの栽培（特に品質、秀率の向上）にはかん水が不可欠であるが、倉吉管内では、かん水設備がなく無かん水で栽培している生産者も多いことから、空洞果や裂果の発生により、秀率、出荷率低下の要因となっている。また、用水路の水が使えても、フィルターがすぐ詰まるため、均一にかん水できない地域もあり､かん水の問題は倉吉のスイカ栽培にとって大きなネックとなっている。

このことは、後作品目においても、かん水作業に多大な労力が必要なことや作れる品目の制限等の不利にもつながっており、生産者の１年間トータルの所得に大きな影響を及ぼすことから、この解消は必須である。



倉吉市のかん水方法の割合（人数）



北栄町かん水方法の割合（人数）

また、ハウスの導入も収益性の向上には欠かせない。ハウスを導入することにより、高単価である６月の出荷率が上がるほか、同時期のトンネル作型よりも着果率、成品率が高い等ロスも少ない。さらに、天候に左右されることなく準備や片付けができることは、後作も含めた計画的な作付けにとって重要な要素である。しかし、倉吉の農地の中には傾斜があったり、かん水のない畑も多く、ハウス導入の隘路となっており、その推進のためにはハウス用地の確保、整備が必要である。

ハウスの面積割合の推移（ha）

作型	H27	H28	H29	H30	R1	R2
ハウス面積(ha)	24.3	26	28	28.5	29	30
トンネル面積(ha)	63.2	64	64	60.5	58	58
合計	87.5	90	92	89	87	88
ハウス割合(%)	27.8	28.9	30.4	32.0	33.3	34.1

さらに、スイカ生産者はスイカ＋後作で年間の収入を確保しており、後作は、ハウスでは葉物、カブ、ダイコン等、露地ではブロッコリー、キャベツ等が栽培されているが、特に露地作は気象の影響を受けやすいため生産が安定せず、大面積の他産地の出荷と重なると一気に単価が下がり収入の計算が難しい状況にある。このことから、安定生産できる施設園芸品目も組み合わせながら収益性の向上を図る必要がある。

「スイカ生産者」を維持・増加させるためには、「スイカの後作」という位置づけではなく、収入面でスイカと両輪となるような「秋冬作」の確立は不可欠である。

（５）ブランド力の向上について

現況、「倉吉市」は県外からの認知度は残念ながらそれほど高くない。これは、新規就農者確保の面でも、販売額増加の面でも不利となっている。逆に言えば、「倉吉市」「倉吉西瓜」の認知度が向上すればこれらに有利に働くと言え、そのために、地域や産地情報、イメージをいかに広く発信するか、最終的に必要としてくれる人に届けるかが課題である。

また､倉吉市にはスイカの出荷時期であっても倉吉のお店で倉吉スイカを食べられる店舗がない。さらには、食品加工業者など農産物に付加価値を付けられる企業も存在するが、これらとの連携はできていない。また、後作品目以外にも果樹等様々な農産物が販売されているが、他の品目と連携した「オール倉吉」での活動はほとんどなされていない。

こうした現状の中、全国的に知名度の低い、小さい地域ならではの、「まとまった」「こまわりのきいた」取り組みが、認知度向上・イメージアップの課題ととらえている。

６　生産部会へのアンケートの実施

今回、前述の５つの課題をベースに、その解決を目的とした地域プランの作成に当たり、改めて生産者の意向把握等を目的としたアンケートを実施し、産地の目指すべき方向性の再確認と、より生産者の意向を反映した具体的解決方策を整理した。

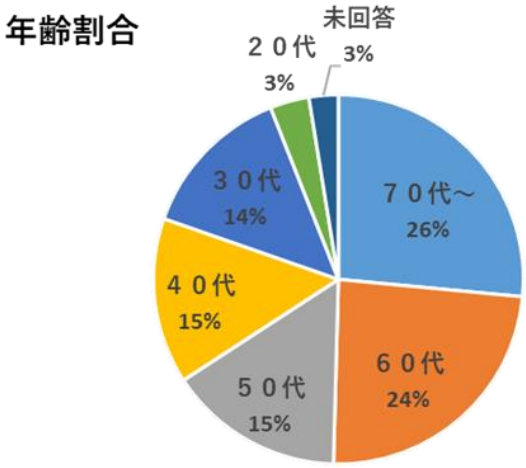
アンケート実施期間　Ｒ２年 11 月～12 月

回答数　１１７件/１３０件（アンケート回答率９０％）

①　年齢

若い生産者からベテランの生産者まで、各年代の生産者が生産部会に所属している。70 代以上の生産者も多く、若い世代に技術を継承していくことが喫緊の課題である。

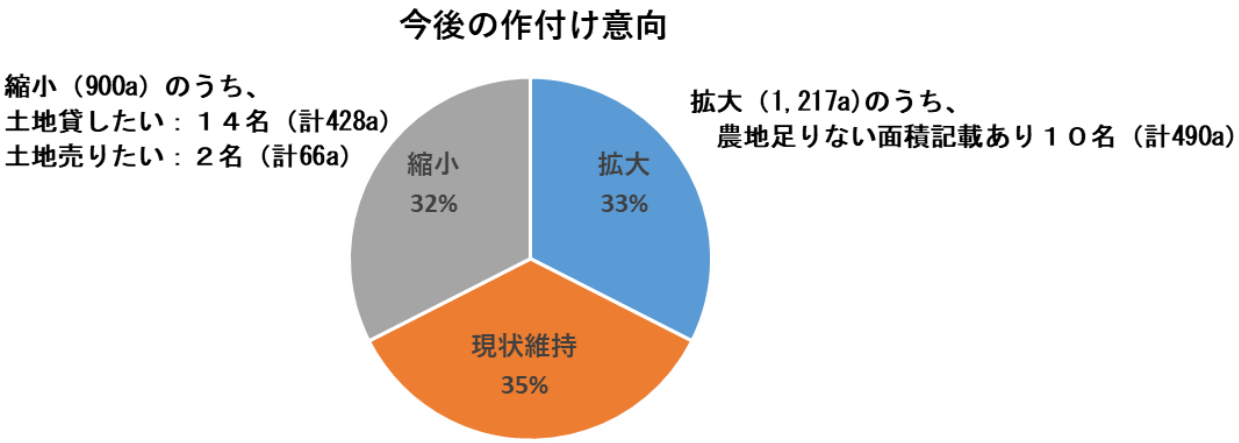
年齢	人数	割合
７０代～	31	26
６０代	28	24
５０代	18	15
４０代	17	15
３０代	16	14
２０代	4	3
未回答	3	3
	117	100



②今後の作付け意向

５年後（Ｒ７年）に規模拡大、現状維持、規模縮小の意向の生産者がそれぞれ約１/３ずつであった。規模拡大面積の合計が 1,217a に対し、規模縮小面積は 900a であり、Ｒ７年にはＲ２年の面積から 317a の面積増加が見込まれる。

面積(a)	R2	R3	R7
ハウス	2,794	2,822	3,049
トンネル	6,156	6,404	6,218
全体	8,950	9,226	9,267
増加（R2から）		276	317



③ハウス整備の要望について

Ｒ３～Ｒ４年に予定されている鳥取型低コストハウス事業を活用したハウス導入希望の他にも、ハウス用地の確保やかん水の問題が解決すればハウス導入を希望する生産者が潜在的に多く存在することが明らかとなった。

ハウス導入意向	人数	棟数	面積（a）
R3導入希望	11	35	117
R4導入希望	5	32	89
ハウス導入希望あり※	17	74	233

※ハウス用地の確保やかん水、整地等の問題が解決すれば導入を希望

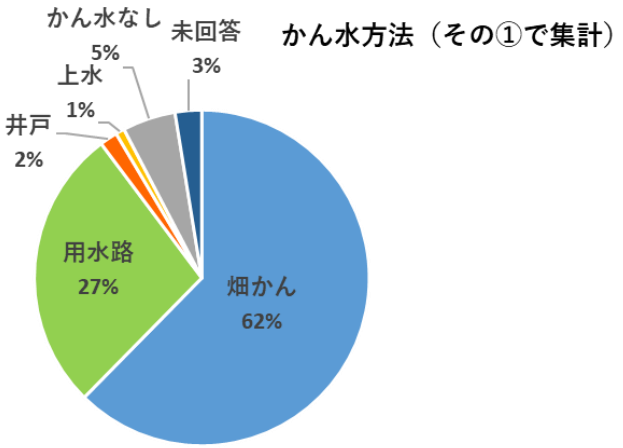
④かん水の環境及びかん水整備の要望について

倉吉管内では畑かんが整備されていない地区も多く、また整備されている地区でもすべての畑で利用可能な状況ではない。

ハウス整備や出荷率、品質向上のため、畑かんの立ち上がりや井戸の整備等かん水環境の整備に関わる要望が多くあがった。

かん水の環境について

かん水方法	その①	その②
畑かん	73	
用水路	32	12
井戸	2	
上水	1	3
河川		1
かん水なし	6	7
未回答	3	
	117	23



※手段が2つ以上ある場合はその②とした。

かん水整備要望	希望人数	希望箇所数
畑かん立ち上がり整備	25	50
井戸の整備	6	9
高性能フィルター導入	16	16

⑤スイカの後作について

露地品目はキャベツとブロッコリーが中心であるが、キャベツは近年の安値傾向もあり、今後は減少する見込みである。

ハウスの後作は葉物野菜を中心にブロッコリー、ダイコン、カブ等様々な品目が作付されている。トマトやストック等高収益な品目に挑戦したいという回答もあった。

スイカの後作として作付けしている品目をとりまとめた結果は以下のとおり。

品目名	現在作付品目		継続したい品目		挑戦したい品目
	ハウス	露地	ハウス	露地	
抑制スイカ	35		33		1
キャベツ		45		27	1
ブロッコリー	16	27	14	23	1
チンゲンサイ	43		29		
ホウレンソウ	16		12		5
ダイコン	11		6		
カブ	17	7	12	1	1
トマト	12		10		3
キュウリ	4		4		
ストック	5		5		2
コマツナ	2				
レタス	2		2		
メロン	3		1		
小玉スイカ	2				
白ネギ	5		4		
葉ネギ	1		1		
インゲン	1		1		
未記入	7		17		

※重複回答あり

6　計画概要（プランの基本方針と産地のあるべき姿）

【基本方針】

倉吉西瓜単独で販売額１６億円を目指します。

① 令和７年の春作販売額１２億円達成を短期目標として設定し、本プランの目標とします。

② 実現に向け、産地の「生産者数」「栽培面積」「単収（kg/10a）」「単価（円／kg）」を「伸ばす」「減らさない」取り組みを実施します。

③ 重点５課題（「新規就農者の確保」「担い手の育成」「優良農地の継承」「収益性の向上」「ブランド力の向上」）に対し、産地・行政が一丸となって、４つの挑戦を行います。

～４つの挑戦～

1．規模拡大や新技術等導入を考える生産者を積極的に支援し、現在および今後の産地を担う中核生産者の育成をはかります。

2．規模拡大を考える生産者の受け皿として、新たなハウス団地の造成を目指します。

3．既存農地の改良・集積を通じて、「退く農家」「攻める（増やす）農家」の円滑なマッチングシステムを構築します。

4．「スイカ産地倉吉」だけでなく、「オール倉吉」として、戦略的な魅力発信を行います。

骨太な生産者の育成

・「裏作」ではなく、スイカ収入と両輪となる「秋冬作」を育成します。
・規模拡大、新技術・新規品目導入等の意欲ある生産者の支援をします。
・規模拡大、安定した秋冬作を組み合わせた、産地を担う骨太な中核生産者を生産者を育成し。「倉吉西瓜営農モデル」を確立します。
・新規就農者が早期に中核生産者へと自立できるよう、「農業」「暮らし」へのフォローを行います。

ハウス団地造成

・倉吉市内に新たなスイカハウス団地（スーパースイカ団地）の造成を目指します。
・かん水・排水対策といった基盤を十分に整えます。
・団地内に新規生産者が入植当初の拠点となるアパート式農地（ハウス＋作業場）も整備します。
・新規就農者と熟練農業者が入植し技術の伝承を行うほか、新技術の試行等モデル的な取組や生産部会の技術指導の拠点となることを目指します。

既存農地の改良・集積

・既存農地の集積を生産部として取り組みます。
・かん水・排水対策を施し、ハウス設置にも耐えうる生産性の高い圃場を確保・整備します。
・規模縮小する生産者の農地・施設等を円滑に継承できるよう、生産部内の仕組みを整えます。
・他品目生産者との連携に取り組みます。

「倉吉西瓜」・「倉吉」魅力発信

・「産地倉吉」のみならず「住みやすい街・倉吉」「職業：スイカ農家」と「販売」「新規生産者確保」両面を意識した発信を行います。
・スイカ以外の農産物、観光資源とタイアップし、消費地での「オール倉吉」ＰＲ活動を実施します。
・顔の見える生産者をテーマに、選んでもらえる産地つくりに取り組みます。
・市内・県内に向けた職業：スイカ農家の魅力発信

（現状：Ｒ２年度春作実績）

栽培面積：88ha（生産者：126 戸）× 単収：5.17ｔ/10a ×単価：236 円／kg =販売額 1,074 百万円

（令和８年度（プラン最終年）目標）

栽培面積 100ha（生産者：140 戸）×単収：5.5ｔ/10a×単価：220 円/ｋｇ

＝販売額 1,210 百万円

【12 億円を目標とする具体的イメージ】

栽培面積の拡大 → 人・農地チーム会議の協議の中で検討

面積拡大　88ha ＋（917a+300a）＝ 約100ha

①生産部会へのアンケート結果より（317a+600a＝917a）

規模拡大面積（1,217a）

規模縮小面積(900a)

317a（純増）

600a

※規模縮小が見込まれる900aのうち、600aを既生産者、新規生産者が継承。
（縮小のうち賃借の要望のある面積494aを含む）

→農地のDB化（ハウス・トンネル毎に継承すべき農地の把握）とマッチングの仕組みづくり（生産部会も一緒に）

②新たにスイカ畑への転換目標（300a）

・遊休農地・荒廃農地の再生（造林苗畑、廃果樹園含む）
・水田、飼料作等他品目からの転換

10a当たり収量アップ

330kg（約40玉アップ）/10a

（10aあたり定植本数 350本（700玉）の約５％）

Ｒ２年単収5.17ｔ →生産部会の目標単収5.5ｔを目指す！

①かん水の整備

無かん水で栽培している畑も多く、単収、品質向上のためにもかん水施設の整備は必須！

→ 裂果防止による出荷率向上
空洞化発生抑制による秀率向上

②栽培技術の向上、底上げによる出荷率・品質の向上

・リアルタイムな情報伝達による、適期管理の強化 → 交配予報の共有による着果率アップ
適期防除によるロス率低減　など

・熟練農家の技術の視覚的なマニュアル作成による技術伝承　　など

販売単価

（現状）直近５年（H28～R２）の５中３の平均単価：215円

※ここ３年間単価高で推移しているため、５中３の平均を現状として考える。

→平均単価220円／kgを目指す！

①ハウス割合増により、単価の高い時期の出荷量増加

②「倉吉西瓜」の知名度アップ、ブランド化

７　プランの具体的内容
≪概要：５つの課題に対する取り組みとその効果について≫

プランの具体的内容	個人面積	部会員	単収	単価	挑戦
【担い手・新規就農者の確保に関する取組】					
（１）新規就農者の確保					
①県外へ向けた産地情報やイメージの発信		◎	○	○	2
②県内・市内へ向けた新規就農者の募集		◎			2
③仕事内容・所得をイメージできる「倉吉西瓜」営農モデルの作成	○	◎			3
④新規就農者の飛び込んできやすい環境整備		◎			2
⑤熟練農家技術の見える化		◎	◎		3
（２）担い手の育成					
①新たなスイカ団地の造成	◎	◎	○		1
②ハウス栽培導入・拡大支援	◎	◎	◎		4
③かん水設備の整備	◎	◎	◎	○	4
④円滑なスイカ農地集積の仕組みづくり	◎	◎			4
【農地利用の効率化・維持管理に関する取組】					
（３）優良農地の継承					
①既存優良農地継承システムの構築	◎	◎			4
②耕作放棄地の再生	◎				4
③かん水設備の整備	【再掲】				4
④円滑なスイカ農地集積の仕組みづくり	【再掲】				4
【核となる品目の生産振興に関する取組】					
（４）収益性の向上					
①ハウス整備の推進	【再掲】				4
②かん水設備の整備	【再掲】				4
③先進技術の導入支援	◎		◎	○	3
④熟練農家技術の見える化	【再掲】				3
⑤スイカ＋αの両輪品目の確立		◎			3
（５）ブランド力向上					
①倉吉フェアの開催		○		◎	2
②市内異業種の連携した新商品の開発				◎	2

※表の見方について

・「個人面積」「部会員」「単収」「単価」欄の「◎」「○」については、記載する「プランの具体的内容」の期待される効果を示します。

・「挑戦」欄の１～４の数字は、前述の「４つの挑戦」の数字を示します。（それに沿って欄の色を塗りつぶしています。）

・５つの課題の中で、複数の課題の解決策に当たるものについては、後に記載するものには「再掲」としています。

≪詳細≫

【担い手・新規就農者の確保に関する取組】

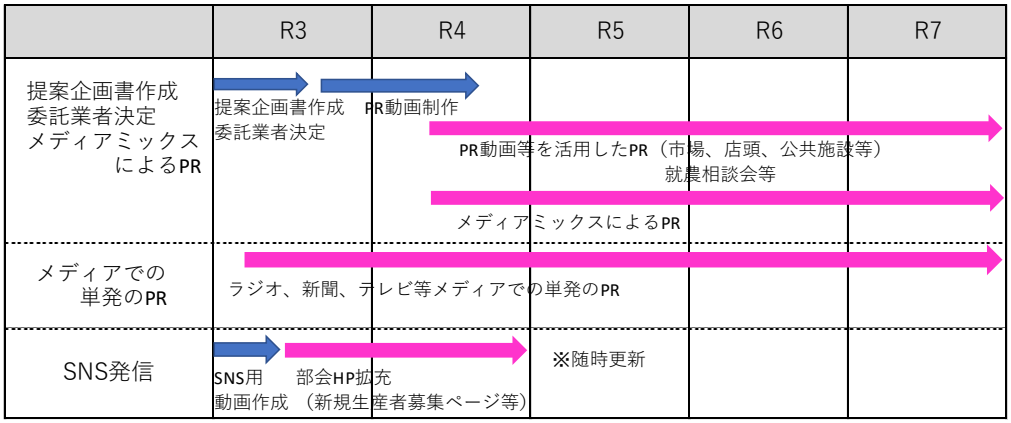
（１）新規就農者の確保・育成

①県外へ向けた産地情報やイメージの発信

産地の情報やイメージをメディアミックスや SNS を活用して強力に発信していくほか、「倉吉」の認知度を上げるため、「スイカ産地倉吉」のみならず、移住と連携した「住みやすい街倉吉」、観光と連携した「美しい街倉吉」など、認知度とイメージの向上をはかる。

初出荷に合わせ、新聞、テレビ、ラジオ、その他ＳＮＳによる集中的なＰＲを実施。

市移住・定住担当課とも連携し、コンペ方式等による素材制作や効果的な情報発信を行う。



②県内・市内へ向けた新規就農者の募集

部会員による、「現役の間に１人は新規生産者を呼び込もう！」目標設定のもと、長い目で見た地域の有望な候補者のリクルートを行う。

就農相談会への参加に加え、親元就農、退職就農、雇用からの就農など、多様なケースを想定しながら、生産部ＨＰやＳＮＳなどオンラインでの情報発信も強化する。

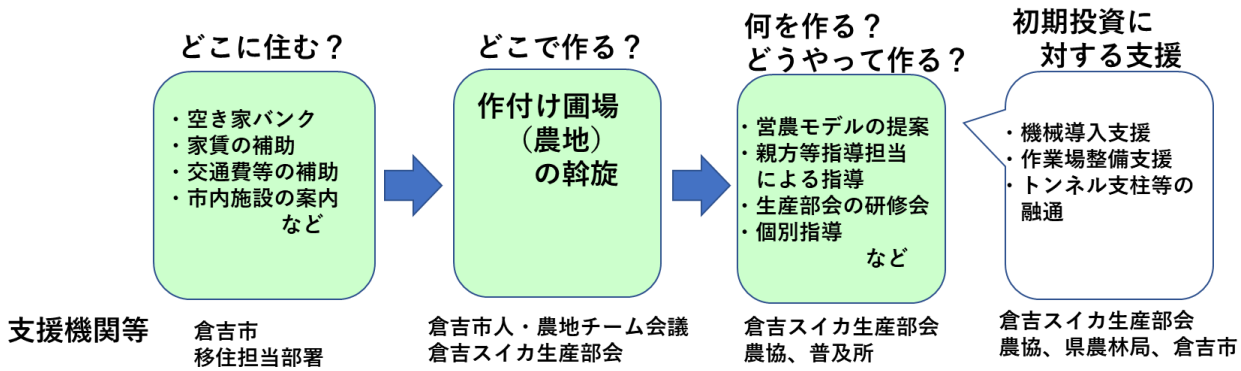
③ 仕事内容・所得をイメージできる「倉吉西瓜」営農モデルの作成

「倉吉西瓜」を生産するうえで、後作も含めた、年間労働スケジュール、期待できる所得、初期投資のイメージできる営農モデルを作成し、新たに産地へ入って来ようとする新規就農候補者の新たな生活設計の一助としてもらい、決意と覚悟を持った新規就農者受け入れをはかる。

④ 新規就農者の飛び込んできやすい環境整備（パッケージ提案）

就農初期の拠点となる圃場と作業場の整備を行い、トンネル支柱等の資材についても融通しあえる仕組みづくりを行う。また、移住関連機関と連携し、安心して暮らせる住居紹介できる仕組みを検討する。

【新規就農者に対する支援をパッケージとして一体的に提案】



⑤　熟練農家技術の見える化

毎年安定して好成績を収める生産者について、土壌分析や温度管理等の数値化や技術の映像化による技術の見える化を行い、技術指導に活用することで産地の栽培技術底上げを図る。

映像化では、スマートレンズ等の活用による熟練者視点の可視化や、通年作業の映像マニュアルを作成し、タブレット等で圃場でも活用できる環境を構築する。

Ｒ３～Ｒ４年：素材動画撮影、作業別にマニュアル編集→編集完了した作業から随時活用。

※素材動画撮影、編集は業者へ委託。

（２）担い手の育成

①「スーパースイカ団地」（新たなスイカ団地）の造成

「産地の中核となる生産者の営農拠点に近く」「スイカ生産に必要な水源と排水性を備え」「ハウス設置にも耐えうる傾斜の少ない」「まとまった農地」を確保するため、新たにスイカ団地の造成実現に向け地元・産地等と連携して検討を行う。これにより規模拡大を考える中核生産者や、軌道に乗り始めた新規就農者を入植させ、産地の栽培面積拡大を図る。

現在、必要な用地等について具体的に決まっているわけではないが、自然発生的に待つのではなく、倉吉市としての政策的誘導も含め積極的に進めたい。

今後は農地の利用調整の一環として、倉吉市人・農地チーム会議の場で協議を進める予定であるが、具体的に団地造成となれば様々な要素の検討が必要となるため、令和７年度目標では方向性決定までとする。

団地化の検討方向については以下のように整理した。

ア　現在のスイカ畑の施設化、担い手への優良農地集積の先に、集約できそうなエリアを決定。

・現在の露地から施設化移行の推進（具体的隘路解消）

・遊休農地・荒廃農地の再生（造林苗畑、廃果樹園含む）

・既スイカ畑の隣接農地へのスイカ作導入推進

・飼料作等からのスイカ作への転換

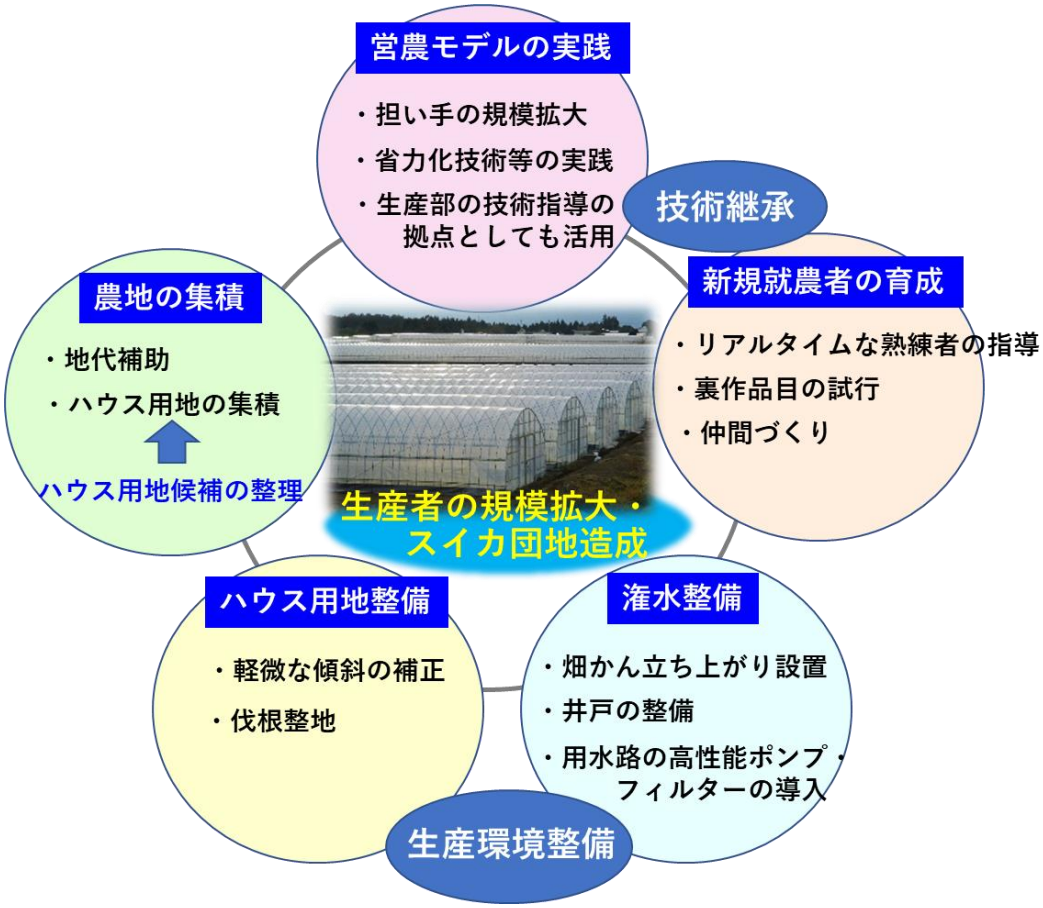
・同時に生産者の意向（生産拡大、分散錯圃）を反映

その結果、ハウス整備に適している一定のエリア（１～２ha）が集約できれば団地化を検討する。

イ　ハウス整備に適した農地（平坦、水あり）をスイカ畑に転換（水田転換、花木畑、飼料畑）。中間管理事業及びその関連事業等を活用し施設化する。

倉吉スイカのシンボルとなるような多機能団地を整備（選果場周辺が好ましい）

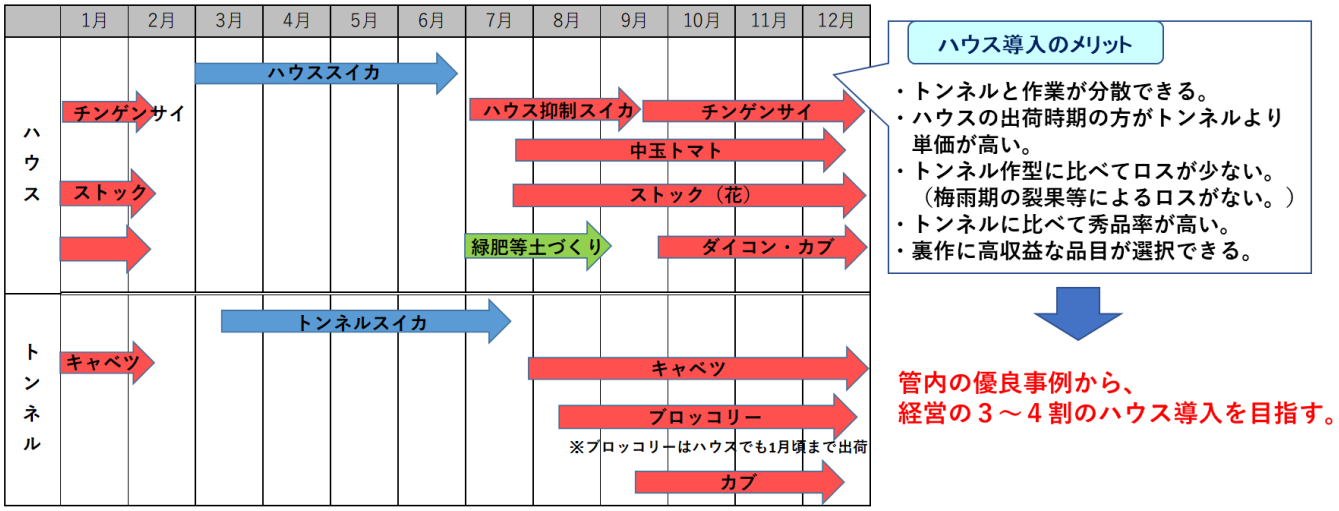
※多機能団地は、新規生産者と熟練生産者が入植し技術の伝承を行うほか、新技術、新品種、裏作品目の試行等モデル的な取り組みの拠点、生産部会の技術指導の拠点となど多くの役割を担うことを想定。



② ハウス栽培導入・拡大支援

露地+ハウスを組み合わせる、あるいはハウス比率を増やすことで農繁期の作期分散と後作での安定した収入確保が見込まれ、規模拡大を考える中核生産者や、軌道に乗り始めた新規就農者の経営強化を支援する

営農モデルの例



③　かん水設備の整備

前述したとおり、スイカの栽培（特に品質、秀率の向上）にはかん水が不可欠であるが、倉吉管内では、かん水設備がなく無かん水で栽培している生産者も多いことから、空洞果や裂果の発生により、秀率、出荷率が減少している。かん水未整備圃場に対し、その状況に合わせて「畑かん立ち上がり設置」「井戸の整備」「用水から安定したかん水実施のための高性能ポンプ・フィルターの導入」を支援し、収量向上だけでなく、これまで行っていた手かん水等での多大な労働時間の改善を図る。

また、かん水の問題はハウス整備を進める上での隘路ともなっており、かん水設備の整備により、さらなるハウス導入の拡大が期待される。

【かん水整備の要望（アンケート結果より）】

かん水整備	希望人数	希望箇所数
畑かん立ち上がり	25	50
井戸	6	9
高性能フィルター導入	16	16

【ハウス導入の要望（アンケート結果より）】

ハウス導入の意向	希望人数	希望棟数	面積（a）
Ｒ３導入希望	11	35	117
Ｒ４導入希望	5	32	89
ハウス導入希望あり （うちかん水が隘路である生産者）	17 (9)	74 (34)	234 (117)

※R3、R4 年導入希望者もかん水整備希望者あり。

④ 円滑なスイカ農地集積の仕組みづくり

人・農地チーム会議の協議の中で、拡大（あるいは縮小）意向の生産者の位置関係を把握し、スイカ作の取り組み拡大と用地のマッチング（隣接する部分同士でのマッチングなど）を一体的に推進し圃場集積を図る。機構集積協力金、産地交付金等も活用し、円滑な農地利用調整を強化する。

目標項目	目標数値	
	現状 令和２年度	目標年度 令和８年度
・新規就農者数（認定新規就農+親元就農者）	５人	20 人 （４人/年×５年間）
・ハウス栽培割合	34%	40%
・団地の造成	―	方向性決定

【農地利用の効率化・維持管理に関する取組】

（３）優良農地の継承

①既存優良農地継承システムの構築

これまでのアンケート結果をもとに、再度生産部会員の耕作意向を調査し、意向に対して足りない面積の把握や、継承を考えていかなければならない圃場の把握など、状況別にリストアップし、随時申告、更新できるようＤＢ化する。

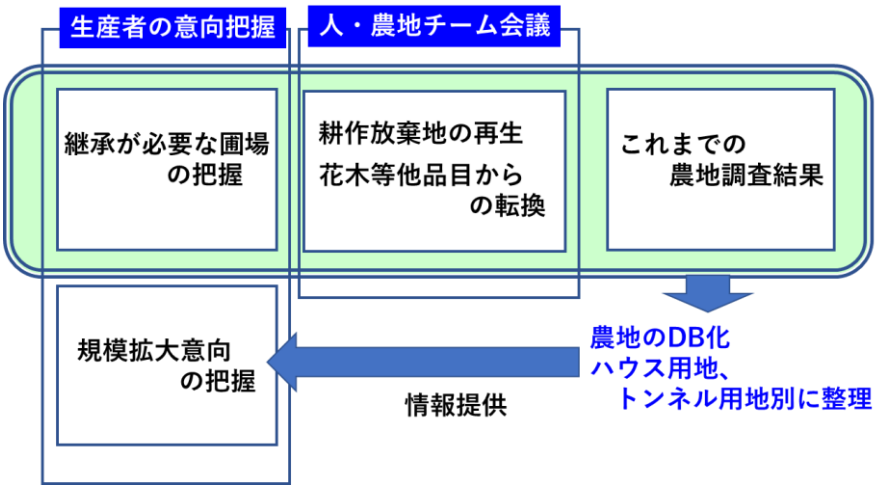
これにより、高齢化・後継者不在等のため栽培を退かれる生産者に対し、その情報を生産部が早めに受け取り規模拡大を検討している生産者へ斡旋する仕組みつくりを行う。

また、情報や直近の動き等については人・農地チーム会議の協議の中でその都度情報共有を図る。

②耕作放棄地の再生・他品目からの転換

本来であれば、「中核農家の拠点となる地域」「排水が良く水源もある」などスイカ栽培に適した条件を持つが、現状、耕作放棄地等となっている圃場について再生し、農地への転換を積極的にすすめる。

現在、人・農地チーム会議の中で山林樹苗の苗場や林地化している圃場のスイカ畑の再生に向け具体的協議（立地、水確保、利用調整、隘路解消の方策と活用事業等）を実施中であり、スイカ畑整備（再生、転換、営農環境整備）の進め方のモデルとして体系的に整理し、今後新たな検討手法に反映させる。



③かん水設備の整備

再掲

④円滑なスイカ農地集積の仕組みづくり

再掲

目標項目	目標数値	
	現状 令和２年度	目標年度 令和８年度
・耕作放棄地再生、品目転換面積	—	３ha（5 年間）
・かん水設備整備	３件 （Ｒ２実績）	20 件 （5 年間）
・農地集積の仕組みつくり	—	仕組運用

【核となる品目の生産振興に関する取組】

（４）収益性の向上

① ハウス整備の推進

再掲

② かん水設備の整備

再掲

③ 新品種、先進技術の導入支援

品質や単収向上につなげるための品種検討を継続して実施するほか、単収向上、省力化による規模拡大にかかわる先進技術（新品種、自動換気システム、環境モニタリング等）を積極的に取り組めるよう支援を行う。

生産部会で先進技術等の展示圃を設置。得られたデータを共有し、効果的な新技術導入を推進する。

【新技術等実証、導入のイメージ】

R3～R4（R7） 環境モニタリング、保温性を高める資材等新技術実証圃を生産部会として設置（試験機器や資材の導入支援）

➡ 実証圃場での勉強会実施、実証結果を報告、共有

【環境モニタリング】

R5～R7 得られた結果から導入の有効性が認められた技術等について導入推進（導入支援）

④ 熟練農家技術の見える化

再掲

⑤ スイカ＋αの両輪品目の確立

スイカの後作について、「後作」ではなく、安定した収入を得られ、スイカとあわせて「両輪」となりえる「秋冬品目」を積極的に推進する。

有望品目の試作支援（品種試験等）、新規チャレンジ支援（資材補助等）、スタートアップ支援（栽培必要機器の支援）、生産拡大支援（機械、予冷庫等の導入）、産地化支援（倉吉ブランド包材作成等）を通じて、スイカ＋αの両輪品目の産地化を進める。

新規チャレンジ支援

R3～R4（R7） 中玉トマト、ストック等スイカ後作品目の新規導入実証圃を各地区に設置（試作に係る種苗費、資材費等を支援）

➡ 実証圃場での勉強会実施、実証結果を報告、共有

スタートアップ・規模拡大支援

R４～R7　スイカ後作品目の本格導入、規模拡大に必要な機器、設備の導入を支援

【機械導入事例とその効果】

〇全自動野菜移植機

キャベツ、ブロッコリー等の定植機の導入による栽培面積増加。

全自動野菜移植機による定植作業の様子

〇野菜袋詰め機

・調整スピードの向上による栽培面積の増加。

・管内のチンゲンサイは、主に業者向けに段ボールにバラ詰めで出荷されているが、袋詰め出荷により小売店等販路拡大を推進。

野菜袋詰め機

〇予冷庫

・ブロッコリー：日中の収穫による作業負担の軽減や作業効率の向上による面積増

・葉物野菜：収穫物を貯蔵できるため、相場を確認し出荷（販売）調整が可能。
高温時（７～９月）の鮮度保持により、品質向上及び栽培が難しい時期の作付けが可能となり面積拡大と高値販売につなげる。

〇ブームスプレーヤ・乗用管理機

・大規模生産者の防除等管理作業省力化・機械化により、さらに規模拡大が可能。
・適期管理による病害虫発生リスクの低減、出荷率の増加。

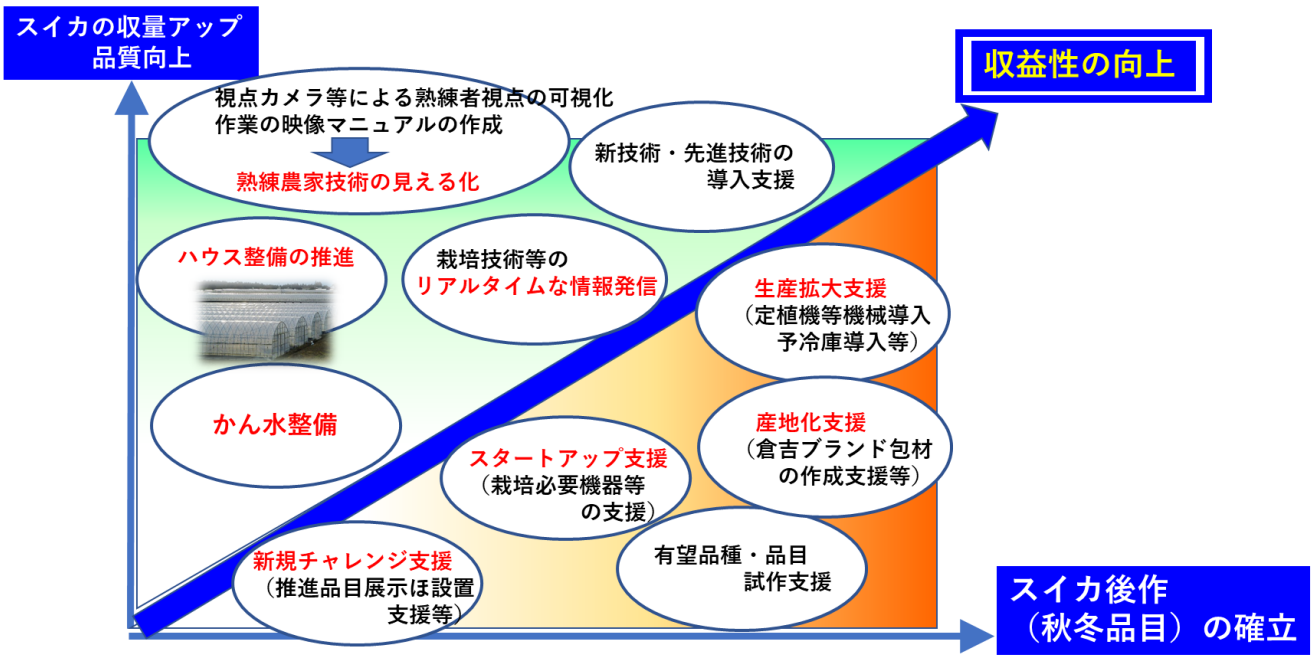
ブームスプレーヤによる農薬散布の様子

⑥ 栽培情報等をリアルタイムで共有できる体制づくり

栽培管理に関する情報や、市況、生産部会の動きなどをメール等で共有し、スピード感のある情報共有を図ることにより、適期管理による収量増加や産地の活力増進につなげる（R3 年実施）。

【共有する情報例】

・換気管理、交配に対する注意喚起→着果率アップ
・病害虫発生状況や防除啓発→適期防除の徹底によるロス低下
・出荷スケジュール→選果場稼働期間中の緊急連絡の周知徹底が可能（品質保持）
・市況→販売状況を随時共有することで、各生産者の生産意識の向上につながる
・部会活動状況→部会の動きが随時共有することで、部会活動の活性化につながる



（５）ブランド力向上

①倉吉フェアの開催

多品目、他産業（観光等）ともタイアップし、県外消費地において、倉吉市イメージキャラクター「くらすけくん」やポスター、販促グッズなどを用いた倉吉フェアを開催し、「オール倉吉」での知名度アップを図り、ひいては倉吉西瓜の知名度向上をはかる。

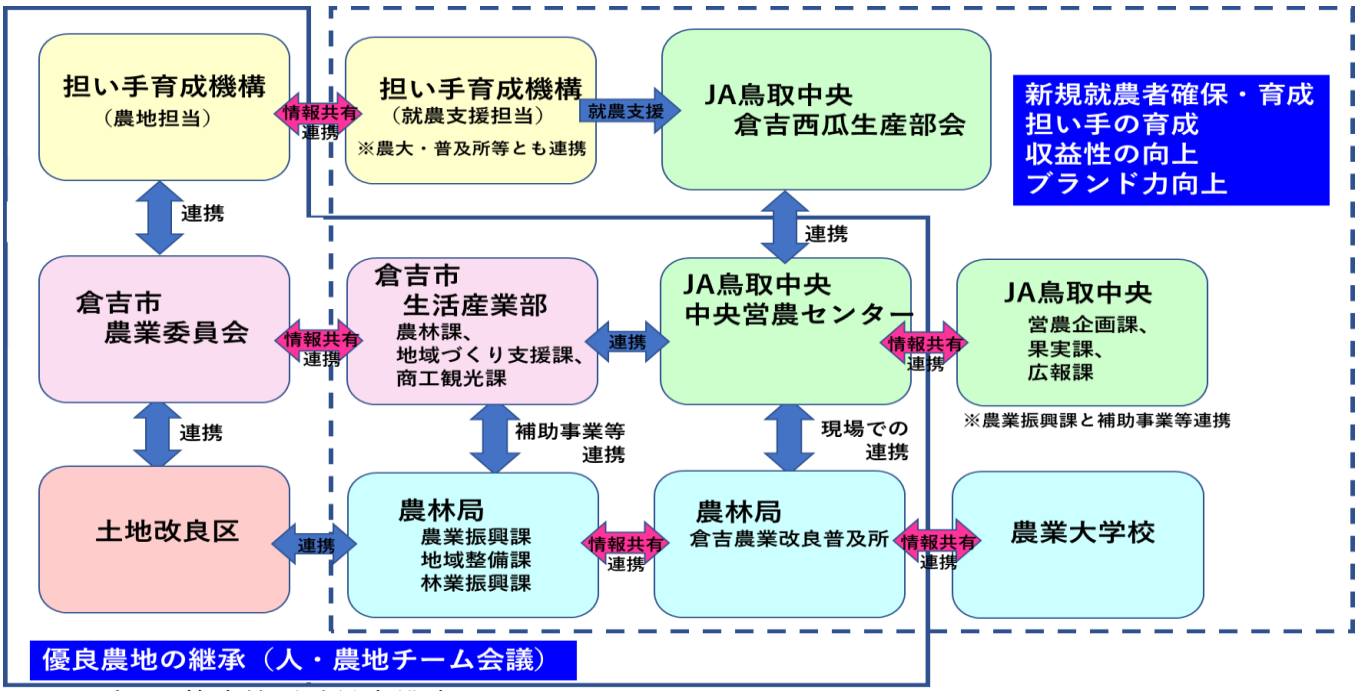
②市内異業種の連携した新商品の開発

市内飲食店とコラボした催しの開催や食品加工業者との６次化商品の開発等により、「倉吉西瓜」「倉吉」の認知度向上をはかる。

「オール倉吉」で「倉吉市」と「倉吉西瓜」の知名度向上

目標項目	目標数値	
	現状 令和２年度	目標年度 令和８年度
・生産者平均単収（ｔ/１０a）	５．１７ｔ	５．５ｔ
・秋冬作（スイカ後作）販売額	３億円	５億円
・倉吉市 PR とのコラボ資材作製	―	作製
・倉吉市内での飲食店・食品加工業者等との連携	―	実現

8　プランの実施体制（フロー図）



9　プラン策定検討委員会構成メンバー

所　　属　　等	氏　　名
JA 鳥取中央　倉吉西瓜生産部会　部会長	岸本　健志　（検討委員長）
副部会長	三舩　浩司
販売部長	宮坂　真生
	山田　有宏
	秋山　正治
	川瀬　悠
中部農林局　局長	妹尾　秀司
〃　農業振興課　課長補佐	吉岡　勉
〃　〃　係長	中野　喬
〃　倉吉農業改良普及所　次長	丸田　謙一
〃　〃　副主幹	飯田　恵
〃　〃　副主幹	前田　香那子
JA 鳥取中央　営農企画課	武田　康寛
〃　販売課	筏津　誠
〃　中央営農センター　センター長	佐伯　知也
〃　〃　果実園芸課　課長	野坂　毅
〃　〃　〃　指導員	前田　恭兵
倉吉市　生活産業部　部長	美舩　誠
〃　〃　農林課　課長	立光　秀樹
〃　〃　〃　係長	和泉　幸志
〃　〃　〃　主事	三浦　貴弘
〃　〃　地域づくり支援課　主任	中本　智浩
〃　〃　商工観光課　主任	稲毛　一智
〃　農業委員会事務局　主幹	石賀　康一

１０　これまでの検討経過について

開催日	会議名（内容）	出席者
R2 年 8 月 28 日（金）	倉吉西瓜販売額１６億円達成プロジェクト会議 （プラン策定キックオフの会）	【JA 鳥取中央】 戸田常務、重道部長、山脇部長 他 中央営農センター 佐伯センター長他 【倉吉市】 美舩部長、立光課長　他 【中部農林局】 妹尾局長、吉岡補佐、丸田次長 他
R2 年 9 月 1 日（金）	倉吉西瓜生産部会役員会 （地域プラン策定に向かう旨について合意。役員の他に意見交換に参加するメンバーを選抜することとなった。→9 月 4 日に再度協議してメンバー決定。	倉吉西瓜生産部役員　７名 中央営農センター、普及所
R2 年 9 月 8 日（火）	倉吉西瓜生産部会による意見交換会 （産地振興における課題や対応策に関して意見交換）	倉吉西瓜生産部会 　役員及び選抜メンバー 計 14 名 中央営農センター 倉吉市、中部農林局
R2 年 9 月 17 日（木）	第１回プラン策定委員会 （基本計画の柱や取組内容のアウトライン（案）について意見交換）	倉吉西瓜生産部会　代表６名 倉吉市、JA 鳥取中央、中部農林局
R2 年 9 月 18 日（金）	倉吉西瓜生産部会による意見交換会 （第１回プラン策定委員会の会議の内容について生産部内でさらに意見交換）	倉吉西瓜生産部会　役員及び選抜メンバー11 名 中央営農センター、普及所
R2 年 10 月 12 日(月)	各機関とプラン概要事前打ち合わせ （基本計画の素案、生産者へのアンケートについて関係者で事前協議）	倉吉市、JA 鳥取中央、中部農林局 ※市役所、農協上層部へも情報共有
R2 年 10 月 19 日(月)	人・農地チーム会議担当者会 （基本計画の概要説明、意見交換）	久米ヶ原土地改良区(小谷理事長他)、担い手機構（永原専務他）、 中部農林局(河田副局長、農業振興課、普及所、地域整備課)
R2 年 10 月 21 日(水)	第２回プラン策定委員会 （基本計画素案、生産者へのアンケートの内容協議）	倉吉西瓜生産部会　代表６名 倉吉市、JA 鳥取中央、中部農林局 とっとり農業戦略課
R2 年 10 月 29 日(木)	倉吉市と中部農林局の打合せ （今後のスケジュール等の打ち合わせ）	倉吉市、中部農林局
R2 年 10 月 29 日(木) ～10 月 30 日(金)	生産部会員へプラン説明 意向アンケート配布 （基本計画の概要を説明）	集落ごとに６回に分けて開催。 生産者の出席者は計１０７名 （アンケートは全戸配布。） 中央営農センター、普及所が出席。
R2 年 11 月 11 日(水)	倉吉西瓜販売額 16 億円達成プロジェクト会議 （市から関係機関へ、基本計画について共有、意見交換）	８月２８日のキックオフのメンバー （戸田常務は欠席）
R2 年 12 月 3 日（木）	倉吉市と農林局の打合せ （基本計画修正、審査会、今後のスケジュール打合せ）	倉吉市、中部農林局

R2 年 12 月 18 日(金)	倉吉西瓜生産部会総会 （生産部会へのアンケート集計結果（12/14 時点）の報告	倉吉西瓜生産部会役員、集落長 計 33 名 JA 中央　戸田常務ほか 倉吉市　美船部長、立光課長 農林局　妹尾局長
R3 年 1 月 7 日（木）	基本計画審査会	
R3 年 1 月 15 日（金）	地域プラン担当者会議 （本プランの内容、取り組み項目について）	倉吉市、中央営農センター、中部農林局
R3 年 2 月 1 日（月）	地域プラン担当者会議 （本プランの内容、取り組み項目について）	倉吉市、中央営農センター、中部農林局
R3 年 2 月 8 日（月）	第３回プラン策定委員会 （本プランの内容、取り組み項目について）	倉吉西瓜生産部会　代表６名 倉吉市、JA 鳥取中央、中部農林局

１１　支援事業の内容（詳細は別紙）

区分	事業実施主体	事業内容	事業費（千円）	実施予定年度
推進事業（ソフト）	ＪＡ鳥取中央 倉吉西瓜生産部 倉吉市	（１） 新規就農者の確保		
		倉吉西瓜・オール倉吉情報発信 （産地ＰＲ動画撮影・加工、メディアミックス等）	7,700	Ｒ３～
		新規就農者確保支援 （就農相談会等出展・開催、PR 資材制作）	1,950	Ｒ３～
		新規就農者環境整備 （トンネル支柱融通等）	3,620	Ｒ４～
		熟練技術の見える化 （モニタリング機器整備・啓発資料作成）	1,000	Ｒ３～
		（３）優良農地の継承		
		耕作放棄地再生、品目転換等 （伐根・整地等）	10,000	Ｒ４～
		（４）収益性の向上		
		リアルタイム情報発信（システム整備等）	5,000	Ｒ３
		秋冬品目確立支援 （新技術導入支援、新品目試作支援）	3,000	Ｒ３～
		（５）ブランド力向上		
		倉吉フェアの開催（旅費・販促費等）	3,400	Ｒ４～
		倉吉オリジナル出荷資材製作	2,670	Ｒ４～
		異業種とのコラボ （材料提供、チラシ作成等）	1,200	Ｒ３～

整備事業（ハード）	ＪＡ鳥取中央 倉吉西瓜生産部 倉吉市	（１）新規就農者の確保		
		新規就農向け設備整備 （作業場等）	1,500	Ｒ４～
		（２）担い手の育成		
		ハウス導入支援	―	Ｒ３～
		かん水整備支援 （畑かん立ち上がり、井戸、フィルター等）	42,842	Ｒ３～
		（４）収益性の向上		
		先進技術の導入 （自動換気・モニタリング機器等）	2,400	Ｒ４～
		推奨秋冬品目確立支援 （スタートアップ・規模拡大）	18,000	Ｒ４～
合計			104,282	

※各取組については内容により他事業の活用も検討する。

※ハウス導入支援については鳥取型低コストハウスによる施設園芸等推進事業（産地生産基盤パワーアップ事業）を活用。

１２　関連事業の内容（がんばる地域プラン事業以外で活用又は活用を検討しているもの）

活用検討事業一覧	国庫・単 県・単市
（１）新規就農者の確保	
農業次世代人材投資資金（旧青年就農給付金）	国
就農条件整備事業	県
就農応援交付金事業	県
親元就農促進支援交付金	県
定年帰農者等支援事業	市
（２）担い手の育成	
鳥取型低コストハウスによる施設園芸等推進事業 （産地生産基盤パワーアップ事業）	国
農地耕作条件改善事業	国
農地中間管理機構関連農地整備事業	国
畑地帯総合整備事業	国
しっかり守る農林基盤交付金	県
【農地利用の効率化・維持管理に関する取組】	
（３）優良農地の継承　※上記記載事業は除く	
機構集積協力金 （地域集積協力金、経営転換協力金、農地整備・集約協力金）	国
水田活用の直接支払交付金	国
担い手規模拡大促進事業	市

【核となる品目の生産振興に関する取組】	
（４）収益性の向上　※上記記載事業は除く	
園芸産地活力増進事業	県
（５）ブランド力向上	
地域特産品づくり事業	市

１３　過去３年間に実施した国、県の補助事業

（１）新規就農者関連（スイカを基幹作物とする者）

①農業次世代人材投資資金（旧青年就農給付金）【国事業】

年度	事業実施者	事業費（円）	国補助金（円）
Ｈ２９	４名	4,615,548	4,615,548
Ｈ３０	５名	6,937,016	6,937,016
Ｒ１	７名	7,411,090	7,411,090
合計	８名（延べ１６名）	18,963,654	18,963,654

②就農条件整備事業【県事業】

年度	事業実施者	事業費（円）	県補助金（円）	市補助金（円）	主な内容
Ｈ２９～Ｒ１	３名	12,258,347	4,086,114	2,043,060	運搬車、土壌消毒機、西瓜用片培土器等

③親元就農促進支援交付金【県事業】

年度	事業実施者	事業費（円）	県補助金（円）	市補助金（円）
Ｒ１	２名	1,600,000	1,066,667	533,333

（２）低コストハウス導入関連

①鳥取型低コストハウスによる施設園芸等推進事業

年度	事業実施者	導入面積(a)	事業費(円)	国補助金(円)	県補助金(円)	市補助金(円)
H27	8名	65.52	38,500,000		19,250,000	6,416,666
H28	10名	87.24	55,099,720	21,513,846	10,146,193	5,073,105
H29	42名	348.48	218,931,930	87,300,461	39,102,742	19,551,408
H30	17名	153.13	96,940,620	39,211,723	16,943,564	8,471,793
R1	6名	46.96	31,027,990	13,276,334	4,939,327	2,469,665
合計	62名（延べ83名）	701.33	440,500,260	161,302,364	90,381,826	41,982,637